

## 寒木瓜

水原秋櫻子より贈らる

見ごとなる寒木瓜なりや据うべくも何處いづにせ  
むと鉢抱だき歩く

我が屋には据ゑむ所なき寒木瓜と抱きあるき  
て花をあはれむ

据ゑむ所探しあるくに眞盛りの寒木瓜の花一  
つこぼれけり

電燈をななめに受くる寒木瓜の老木おいの花の群  
らがりて照る



又

寒木瓜の大いなる鉢ある忘れ夜の灯に照るを  
見出で驚く

太き幹にくれなるの花群らがらす寒木瓜よ汝  
れは生きてあるなり

寒 波

シベリアより來にし寒波の底知らぬこの寒け  
さや身にしみとほる

187  
嚴寒の幾日<sup>いく</sup>を續きゆるみ來ず風邪<sup>かぜ</sup>引くなゆめ  
と子等戒むる



身の弱さあはれむ心わが持ちて朝の食卓に子  
等が顔見つ

時事を見て

實際を重んずること極まりて情實の泥海とし  
擴がる

情實の泥海どろうみに喘ぎ指導者らその手は擧ぐれ指  
す所知らず

複雑の蒸し暑さ久しく日本人我らの素質堪へ  
ざらむとす

集團の大おほをなす時その持たむ理念はいよよ單  
純なるべし



形式は正に理論の現はれなり理論と共に單純なるべき

附合

附合は難きものかもおのづから逢ふ日あらむと思へどあらぬ

相逢ふも顔見せ合ふに過ぎざれど心安からず逢はで過せば

交は心にとや形をば求めむとせぬこころ何なる

附合に心する友一人持ち事毎におもふその尊さを



## 春の土

かたまれる花壇の土をほぐしつつ見出で驚く  
白き芽持つ根に

芽を持てる草花の根に掘りあてつ慌て惑ひて  
土うち被かぶす

物の芽のありやと指をさし入れてほぐす花壇  
の土あたたかし

指をもて掘りかへす土のほのかなる匂ひの嬉  
し指は痛めど

何物もあらぬさまなりその下に數多芽を持つ  
春のこの土



## 庭の木瓜

思ひ出でて目をやりたるに物蔭の木瓜蕾もつ  
くれなるに數多

棄ておけどおのづから育つ春の木のつけ得る  
限りの蕾ふくらます

## 沈丁花の垣

郊外の路かぐはしく沈丁花生垣とせる家に逢  
ひたる

沈丁花垣にかをれる野の家の窗を閉ちては人  
の音せぬ



顔知れる人の出で來よ生垣の沈丁花褒めても  
のいひ懸けむ

就職難

笑顔をば向けてものいへこの人も深き憂を胸  
に持ちたる

くづし出でて憂を語る若人わかうさに堪へ忍べよとた  
だにいひぬる

出来ることとするよりほかに術すべなきをな嘆きそ  
といひて寂しき

又



辛うじて職を得たりと玄關に靴ぬぎつつも森  
の我に告ぐ

文學を修めし森の職求め東京の町を疲れて歩  
ける

求めたる職得し森のさみしげに顔の疲れて笑  
みを浮べず

病 妻

病妻<sup>びやうさい</sup>を草津<sup>くさつ</sup>に遣れりと時計見つゝいまだ着かず  
と谷の我にいふ

病妻の輸送ゆだねし看護婦の厭ひたりといひ  
て笑はむとしぬ



今は着きぬ事無かりしと時計見て谷の起ちたり  
り時待てるらし

## 童

三輪車五つを繩もて繋ぎ合せ童わらべいきごみ走り  
出むとす

繩をもてつなぐ五つの三輪車童目は据うれ唯  
ぐるぐると

## 折々に

こを好すかぬ人もありよと訝しみしみじみとし  
てひとり茶を飲む



各に肯<sup>うへな</sup>ひぬべきことわりのありとは聞けど肯  
ひ難し

煙突を出づる黒けむりもくもくと湧き立つ見  
れば坐りて居難き

煙突の煙もくもくと渦巻きて薄曇りせる春の  
空廣し

初夏の花木

古馴染山吹の花さける見ればなつかしくして  
寂しくありけり

花壇なる諸々の草咲きそろひ永き日ねもす搖  
らぎてやまぬ



明らかに見むと木下に寄りゆけば桐の紫空に  
まぎれけり

晝なかの晴れてうるほふ空にまぎれ目にとめ  
難し桐の紫

わが體衰ふる頃と楓の木の若葉にはかに繁り  
ぞきたる

よぼよぼと生きのたつきをたどり來て老いし  
を思ふ若葉の空に

庭木みな若葉する日を寒竹かんちくの主人あるじわれに似て  
ひとり衰ふ

若葉せる木立にまじり青桐のひとり眞裸の枝  
さしのばす



門出づれば屋敷木青し行く路に繁りよろめく  
垣の積殻

## 五月雨

ふる雨の五月雨めけり傘持たで濡れゆく人の  
急ぐとはせぬ

くれなるのレイン・コートに身を包む學童小さ  
し廣き舗道に

學生の二人押並び一着のレイン・コートとなり  
て道來る



## 青年夭折す

市岡勘三君は我が縁者なり。帝大法科を出で、文官試験を受けんとする際、補充兵として召集され一月を出でずして病死せり。遺骨の信濃に歸るを新宿驛に見送る。

死にしと聞き打驚けば眞心のほとぼしり出で  
む勘三あらはる

老の頼み懸けける親のわが顔見言葉はなくて  
涙こぼしたり

際やかなる印象残し若くして死にける人の骨  
壺見送る

親しかる數多の人の顔合はせ立ちつくしては  
言葉の出でぬ



## 雛芥子

雛芥子のか細長莖伸び立てる末に咲かしめぬ  
くれなゐの花

咲き出でし雛芥子の花くれなゐのひたすらに  
してあはれなるかな

くれなゐに咲ける雛芥子風ありて揺るるにこ  
そはいと愛でたけれ



## 誕生日

電報の文字もどかしみ、飛び飛びに目を走らして、その心捉へはかねつ。大患の縁者持つ今、必ずやそれと思ふに、いたましき顔まづ浮び、見る文字を遮りけるが、漸くに読みつづけ得て、聲立てて打笑ひたり。大分に住める小宅が、誕生日今日と覺えて、はるばるに我を祝ひて贈れる言葉ぞ。

## 庭

青竹の建仁寺垣雨にぬれ庭のわか葉の奥あるに似る

眞白くも咲けるさつきの一つ花乏しとはせず  
若葉の庭に



故郷

六十八の木下尙江うち笑ひ、世界の良き地は松  
本ぞといふ

雉子菜きじなありかくもありよと因幡人いなびら佐伯さへきは驚く  
路に足とめて

神と仰ぐ明治大帝長くもすゐきのあえ物戀ひ  
させましぬと

市岡不傳居士

不傳は道號にして、本名は傳太、我が従兄なり。  
幼少より馴染みて交渉する所深し。  
六月二十一日腦溢血にて逝く。年七十三。  
居士もと富みたりしが、企業を好める爲に  
貧しくなり、晩年は佛道に専念せり。

病中に



我が手をばかたく握りてもものいへどもつるる  
舌の言葉をなさぬ

右の手の利かぬに左の手をもちて病は棄てつ  
と君の書きたる

病<sup>やまひ</sup>輕しやがて癒えむとわがいふに賢<sup>おきな</sup>き翁目も  
てよろこぶ

品川海晏寺に葬る

いささかの遺<sup>のこ</sup>せる骨を土に埋づめ心限りなし  
君に水濺ぐ

君が骨土に埋づめていそがしく風の涼しき寺  
を立ち出づ



苦<sup>にが</sup>き顔たちまち笑みにくづすなる君にてあり  
 き笑みつづけぬむ

## 居士を思ひて

幼な目に賢き人とあふぎ見し心たもちて老い  
 たり我も

善し悪しはとまれかくまれ一つ根の離れがた  
 くも君と我がありぬ

ただ一人<sup>ひと</sup>我に残れる親族の目上びととぞたの  
 めるものを

詮ずるに世は利害なりといひにける君が得し  
 利のつひに何なる



損得をひたすらに君思ひにき今は安らに福者  
とならせる

老いの目をかがやかしては企てし昨日きのふの事を  
今日は語らぬ

一つ事に心をつなぐ人見やり愚しやとて君の  
吐息さいきつく

思ひ出をつひに語らぬ老い人の君を思へばさ  
びしくも清し

崩れをはり既に爲む術すべなかりしも人目を包み  
在り經けり君

221  
錢あれば物振舞ひて喜ぶに持たせまほしき君  
なりけるを



技術家にあらましかばと思ふ君たどるたどる  
も佛書讀みゐる

禪堂に物食ふ習ひ身に持ちて懇ろなりしを箸  
とるに思ふ

要いらずといへ強ひても我に持たせける法帖の  
ありて形見となれる

相模二の宮海岸

二の宮

相模の二の宮の海のひびき聞き心かすかに夏  
を我がゐる



この日頃我をめぐりてある物は夏の木草きぐさと山  
と海となり

## 海

青き海空に向ひて斜めにも高まる涯はそにわが目  
を送る

白波の崩れひろがり薄れゆくほの青けきを夕  
日の照らせる

## 海邊の松林

敷く莫塵をとほしてわが背にしみて來る松の  
木蔭の夏の砂の冷え



砂に寝て見やれば怪し老松おいまつの立ち續きたる太  
き幹立うきだち

砂の上に目瞑りめづむをればかすかなる聲耳につく  
松の小鳥か

松に潜む小鳥のありて愛らしき寂びたる聲の  
交々こもこも落ち來る

砂に寝て心の清し小鳥の音たのしみをりて微ま  
睡みるにけり

## その二

目覺むればわが目の上に松青く葉がひに高く  
照り光る空



枕かへ目をやる方に松つづき廣き青波照りて  
寄り來る

莫塵しきてわが寢る砂に咲ける花うす紫の目  
よりも低き

砂渡る細き風あり目につづく草の葉ゆすり我  
が眉に來る

その三

莫塵ひろげ腰をおろせば様變り廣くして清し  
磯松林

清らなる眞砂に散らばふ實生の松すべて木高  
さ寸ばかりなり



松蔭の清き眞砂に枯れ松葉刺せば入り行くい  
や入れと押す

朝空

大山おほやまの空に薄雲白く浮び海原かけてただに眞  
青なる

いにしへの笠著て旅をせし人のわが笠と見  
けむ空の青きかも

朝の磯

夜明け方の海に向ひてこの濱に老いたる漁夫  
の見とれ蹲る



命の糧充たせる海とおもふ漁夫の眼覺むるや  
 がて此所にし來しか

かの山に横穴の墓残したるいにしへ人の姿と  
 ぞ見る

めでたしと海を見れども濱人の心汲み得ぬ我  
 は旅人

二の宮町の北を劃りて、秋葉、吾妻な  
 どの小山連互す。

かがやける空より落ちて風涼し山に見おろす  
 海の廣らなる

山頂に見かへれば大き海坂の雲ゐる空に高ま  
 り紛る



山松の梢を透きていや青く照れるは空かはた  
海坂か

吾妻の山人が築きける物見臺太き夏葛這ひも  
とほろふ

山頂に立ちて見おろす磯の波真白く細く涯し  
のあらず

小さき畑くざりて作る胡麻小豆長薯もありて  
ものの哀れなり

大きき鎌振りて青萱刈る人の刈りすすみゆく日  
に照れる萱

酷暑



暑やとて机離れて寝ころべど手をさし伸べて  
本取りにけり

本持てば暑さ本より來と思へ本をし置けど涼  
しくはあらず

暑やとて疊の上に腹這ひつ顔さし上ぐれば空  
に松光る

## 晝

遠雲の晝を凝りては白く照り眞裸の背に汗に  
じみ出づ

青空に大きく揺らぐ老松おいまつの十四五本を斜めに  
あふぐ



大き蜻蛉門さんぼかきより我が家に入り來り忙しげにし  
 て裏へ抜けにけり

風ある日に

松風の音の擴ごり耳をもて迎れば遠く深くあ  
 りける

松蔭の苔に散らほふ小さき笹我をめぐりて頻  
 りに揺るる

吹く風に松の高枝たかえの揺らぎ合ひこぼれ來る葉  
 の時に顔打つ

蠅の多きに惱む



用をしてゐる我なるを忍び寄り離れつとまり  
つくすぐる蠅ども

うるささに馴れむとおもへ手に顔にとまりて  
蠢く幾つもの蠅

我をしも好きて寄りくる蠅なりと知るに腹立  
ち打ち叩きあるく

蠅叩き叩くに逃ぐる一つ蠅大<sup>かたき</sup>き敵となして追  
ひゆく

此所に來ればかく叩かれて動けぬを友蠅ども  
に教へてやりたき



知る童<sup>わらべ</sup>ただに差出す紙袋何ぞと見れば轡虫の  
三つ

飼ふべくも籠のあらねば轡虫ここにし居よと  
藤棚に放つ

ゐるやゐずや危ぶみ思ふ轡むし藤棚の上より  
短く鳴きぬ

再びは鳴かぬ轡虫この夕べ家の前なる稗畑に  
鳴く

隣家の犬狎れて我が家のもの  
如し。

足踏み張り我を見あげて小さき犬ひたすらに  
しもその尾打振る



節せつ付けて唸りつづくこの小犬尾を振る見れば喜ぶ聲か

手をやりて頭あたま撫づれば身をすり寄せこの赤き犬離れむとせぬ

口笛を吹けばあらはれいつる犬呼びしは誰そと惑ひ顔見る

松蔭の冷たき砂に首のべて動かぬ犬の眠り入りにけり

夕べ

軒につづく藤棚暗し下通し白く照りたる夏の西空



藤棚の下くぐりては夕日さしおはぐる蜻蛉疊  
舞ひめぐる

家の前の建仁寺垣粗き透き路へだてたる稗畑  
青し

動き来る涼しき氣あり寝て見やる稗の細葉の  
ゆらめき出づる

投げいだす我が脛はざの毛に来て觸るる細き風こ  
そ涼しかりけれ

歸京して、晩夏再び二の宮に行ける  
列車中。

ほとぼしる水道の水横日さし光と散るを童掌わらべ  
して飲む



土冷えて根を置く草の堪へぬとや繁き緑のけ  
はひ寂しき

青雲と夏野が刻む地平線低き家群やぐらのその一部  
亂す

茫漠と取りとめのあらぬ濁り空一すぢの煙黒  
く流れたり

驛つ附きの二室まほどなる小さき家花壇はなだん美し種々くさくさ  
の花

松山に落ち入りし夏日さか逆しまに照らす光の廣  
しやこの空

二の宮にて



セル著れど猶寒き日の午ひるさがり蕎麥食はずや  
と子等そそのかす

海の上に浮ぶ白雲夕されば俄にちぎれ細り薄  
るる

澄める月海に斜めなり松蔭の暗きに鳴きて亂  
るる虫の音

### 賀 筵

前田晁君「少年國史物語」六卷を完成す。

幾年を心傾け書き繼ぎじ書しよの成りけりと友の  
よろこぶ

この喜び妻子さいしに分けむ君も來よ酒飲み物食べ  
遊ばむといふ



人の身に喜びあるは稀らなり友ありよろこび  
分つとぞいふ

待ちにける喜びの日の今日となり身の惱まし  
くわが行き難き

又の日と友はいふべし我もまた又の日を頼む  
又の日よあれ

嫂が言

賑やかに暮したまへよ、賑やかにと嫂あねのいは  
しぬ。世に老いし人なるからに、若きわれ耳  
留めて聞きき。實ひにも然さなりや。



## 義齒

上<sup>うは</sup>齒<sup>は</sup>みな抜きとられたるすぼめ口あはれがり  
 つつ妻も子も笑ふ

齒のあらぬ口の可笑しさ唇の垂れ込みすぼま  
 りものをいはせぬ

有り馴れてその尊さを忘れたり齒は有難し亡  
 き親の如

齒のあらぬわが口もとよいたましみ見し老人<sup>おきな</sup>  
 のそれこれに似る



颯  
風

颯風の午後には來らむ明日こそと心重苦し寢  
るに起くるに

落ちつける心となりて今日ををれば面白きも  
のあまたあるに似る

物  
欲

暮しにくき世にし生くるとわが親も我も思ひ  
ぬ子も思ふらし

暮しにくき世とは誰がせし然思ふみづからな  
りと聖ひじりはいはす



老づきて嘆き少く我のなり咎めむ者のあたり  
にあらぬ

憐みてあるべきものの人なりと今にして知り  
心静けし

## 柿

塀越しに竿のび出でて我が庭の柿にとどけり  
ほしとやこの柿

股<sup>また</sup>竿<sup>さる</sup>のちぎれる柿はあなあはれ落ちて此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>な  
り塀<sup>せき</sup>の外<sup>そと</sup>の童

餘所の子の盗みそこねし落し柿手に拾ひては  
持て餘しゐる



## 目白臺新坂

久しくも見ぬにと心動きては秋日あたたかき  
新坂しんざかを登る

秋の光しづかにさしてこの家の櫛の木立の奥  
深く見ゆ

石の塀築つきては長し廣業のここに住まむとし  
たりけりとぞ（畫家寺崎廣業の家跡）

由縁ゆかりある人の住めるによくも來こし路あはれに  
も清きよかなるかな（人は親戚なる故人）

鋪道ふだう廣く續き涯はなし在りし日の立つ秋埃あきほこり胸に  
きらめく（鋪道の成りしは近年なり）



## 町中の山野

戸越なる木下立安氏の家にて

門もんを入れば秋の落葉おちばの深くして踏むふに音立つ  
る家にわが來し

低き木にからみて赤き烏瓜あまた群るるに何  
ぞやと見し

ゑみ割れてくれなる涼しき一つ柘榴はつじゆ撓む細枝ほそえだ  
の長きが末に

その二



黄に枯れし芝生廣らに日に光りあなたに白し  
一むら穂薄

南なんなみの空に向ひて縁にさす秋のひかりに膝を抱  
ふる

四阿屋を造るとならし白樺の丸木の柱人の立  
てゐる

この庭に多き柿の實見出でけむ群れてさやか  
に下おり来る野の鳥

その庭に野と林とを留どめ置き秋深ましむ主あま  
人の翁おきな



伊豆古奈温泉

湯は鎌倉時代よりのものにて源頼朝も浴せしといふ。

ややぬるき湯に肩沈め薄青く揺れて溢るる湯の色喜ぶ

かくの如湯のやはらかき喜びし源家の嫡子流人なる日に

湯上りの頬につめたくも沁むものか青苔持てる北庭の土

温泉宿客少し



人が立つる音の聞えぬ家に来てあはれやわが  
耳惑ひ怪しむ

廂くぐりさし入る冬日鐵瓶の口より出づる湯  
氣をぞ照らす

落葉はく箒の音の遙かにも低き方かたよりさやかに  
聞ゆ

亡なき兄が愛でける素軒居士の書と目をあげて  
見る大きその字を

青桐の黄に染む梢の高き越え十一月三十日みそかを  
光り飛ぶ蜻蛉

秋山の暮れて暗くもなりゆくに半僧坊の灯の  
一つつきぬ



高き音を怪しみ聞きぬ庭の池に夜よるを跳ねたる  
鯉にてありけむ

屋後の小山に登る

亂れ鳴く山の鳥ども一一を知らば親しさ加は  
りなむを

友の悟堂今ここにあらば亂れ鳴くもろもろの  
小鳥教へくれむに

椎山の一もと楓くれなゐに染み極まりて揺ら  
ぐとぞする

日に光る深紅しんくの楓一葉一葉その葉擴ぐる蒼空  
の前に



山畑に作れる陸稻ほとほとに穂を出さずして  
素枯れたりけり

山畑に薯掘る翁ねぎらへば正にといひて我に  
顔向く

富士山あらはる

あないみじ晴れつくしたる秋空に白きいただ  
き浮ぶる富士が根

ここにきて今日をわが見る富士が根は清ら極  
まり世のものならず

雪光る富士が根見つつ今日をわれ目のあるこ  
とを嬉しとぞ思ふ



町を行く

松山の木下の雑木もみちせり日影直さすその  
松山に

柿の木に柿なりになる塀の内の黄に照る柿の  
木怪しみわが見し

光琳寺ひと本銀杏やます散り木下とほる我の  
肩にきらめく

讀本の棗にと我がしたりける銀杏の黄葉を娘  
の拾ふ

羅漢山山下に檀家満つれども兒の泣く聲も立  
つる家のなき



この山に數多並べる古石碑禮ふかきかも皆檜  
立つ

温泉町行きつくしては檜賣る蜜柑賣る婆の二  
人に逢へり

佛います御寺の多し伊豆びとは佛のみ顔見る  
多からむ

もの問へば皆懇ろに教ふるに旅びと我の伊豆  
の國を褒む

三津みとに水族館を観る

人が言こまさに聞き分け大海おほ豚いるかやさしき口あけ  
海に擡ぐる



やさしき目三哩マイルを見見えぬ耳五哩を聞くとぞ  
むくつけき海豚

三年より生き難しといふ遠き海の海豚あはれ  
に人に馴れたり

一時間百六十哩を泳ぐ海豚ここに飼はれて魚  
捕るを忘る

水底みぞの岩とわが見つ竿をもて人のつつけばこ  
は大き龜

正覺坊短き手伸べこもごもに水掻き泳ぐ見れ  
ばさみしき

正覺坊重きその身を泳がしめいかにすると見  
れば水底みぞに蹲しゃがみぬ



## 海金魚

磯岩の肌にゆらめく緑青ろくしょうの小魚の群むらあり日影  
さし入る

緑青のこの海金魚うつくしみ人捕りて飼へば  
黒くなるといふ

うつくしきこの緑青の磯の魚その親も子も大  
き魚の餌か

蒼海に裾曳く富士の澄み渡る秋空の上に白き  
峰をおく

蒼海と蒼空のうちにひとり立ちいただき白く  
富士わだかまる



## 丸の内

丸の内高層建築の間の道夜の眞暗くわれ押竦  
むる

火光あらぬ高層建築くもり夜を眞黒く聳え彼  
方に赤き灯

丸の内夜の鋪道に人あらずわが靴音の反響を  
かへす

## 冬の庭

山吹の黄に染みし葉のはらはらと箒や觸れし  
青苔に落つ



寒竹の細葉がうへにからみたる素枯れもみぢ  
葉指もて拂ふ

除夜

除夜の町見むといふ子に寝よ寝よと勧めて我  
の先も寝にける

湯たんぽに足あたたためて寝てあれば細く鳴り  
来る除夜の鐘の音



## 卷末記

明治十年丑年生まれである私は、本年の丑年は正に五回目で、いはゆる還暦に相當するのである。古い風に随ふと今年はその祝をするべき年だといふ。漂泊者に近い生活してゐる私には、さうした心は持ち難いが、さすがに仕來たりには争はれない所があつて、時として、襲はれるやうに身に老いを感じることもある。舊友の半ばは既に故人となつてゐる。虚弱であつた私が、たまたま生き残つてゐるのであるから、身祝とまではいはず、記念の心をもつて何か出来ることをしようと思ひ立つた。それが結局、歌集の刊行となつたのである。本書は即ちそれである。

本書に収めた歌は、昭和九年から同十一年までの三ヶ年間のものである。私の年齢からいふと、五十八歳より六十歳までである。歌集としては、『さざれ水』



に次ぐものである。

『郷愁』といふ題は、古く同じものが他にもあるのを知つてゐるので、穩當を缺く感があるが、歌集としては思ひ浮ぶものがないので、取つて命じることとした。

さう思ひ立つた時である。その題の説明ともいふべき歌が出来た。説明に代へて添へることとする。

さみしさの沁み出て溜る思ひありこの快さよ老いて今知る  
ひとりありて時に澄みくる心にぞ老いて今持つ郷愁を寄する  
身の老いを何か嘆かむやややに我にふえ來る心深きもの  
おのづから持ちうる心に安んじてよしとあしとを我の思はず  
言葉の過ぎる感がなくもないが、偽りではない。自身の記念としては、むしろふさはしい感がする言葉なので、あへて『郷愁』と題することとした。

古人は、歌は翫ぶものにあらず、翫ばるるものなりといつてゐる。若くして怪しみをもつて聞いた言葉も、老い來つてその世の常の嘆きであることを會得するやうになつた。まことに、何よりも思ふままになるはずの歌ではあるが、實際はその反對のみである。得たものは、ただ淺ましい度胸のみで、衷心慚愧たるものがある。

創作慾もまた、いつともなく衰へて來てゐるのであるが、時あつて蠱惑となり、慰めとなつて、記念の物と思ふと、やはり心がこれに寄つて來る。集を編む毎に、繰返し思つたことを、今又更に思はせられてゐる。

本書は、書物展望社主齋藤昌三氏によつて刊行されることとなつた。その爲從來例のない装幀を持つこととなつた。謝意を表する。

又、私の關係してゐる「槻の木會」と稱する歌會があつて、「槻の木叢書」と題する叢書を刊行してゐる。本書をその空白となつてゐる第一篇にあてる事と



する。

昭和十二年五月

窪田空穂

### 再版について

本書は久しく絶版となつてゐたのを、今度八雲書林主鎌田敬止君の手によつて再版されることとなつたものである。現在の如き緊迫した時局下において、此の事は如何かと思はれることであるが、既にその運びとなつてゐることとて、今更何うすべきでもない。その他には著者として添へていふべき何事もない、唯鎌田敬止君の好意を謝するのみである。

昭和十八年十一月

窪田空穂



郷愁  
出版會承認イ140046

著者略歴。明治十年六月八日、長野縣に生る。同三十七年早稻田專門學校卒、現在、早稻田大學文學部教授、藝術院會員、日本文學報國會短歌部理事。歌誌「槻の木」主宰。主著、冬日さし・短歌をめぐりて・古今和歌集評釋・新古今和歌集評釋・萬葉集評釋

<p>發行所 東京都大森區調布嶺町一ノ三四七 八雲書林 振替口座東京一六三〇九八 會員番號一三六〇一四</p>	<p>著者 窪田空穂 東京都大森區調布嶺町一ノ三四七</p> <p>發行者 鎌田敬止 東京都京橋區築地一ノ一四</p> <p>印刷者 川橋源三郎 (東東二五一七)</p>	<p>昭和十九年一月十一日印刷 昭和十九年一月十五日發行(一、五〇〇)</p> <p>定價三圓 特別行爲稅十三錢 賣價三圓十三錢</p>
---	---	--

配給元・日本出版配給株式會社・東京都神田區淡路町二ノ九

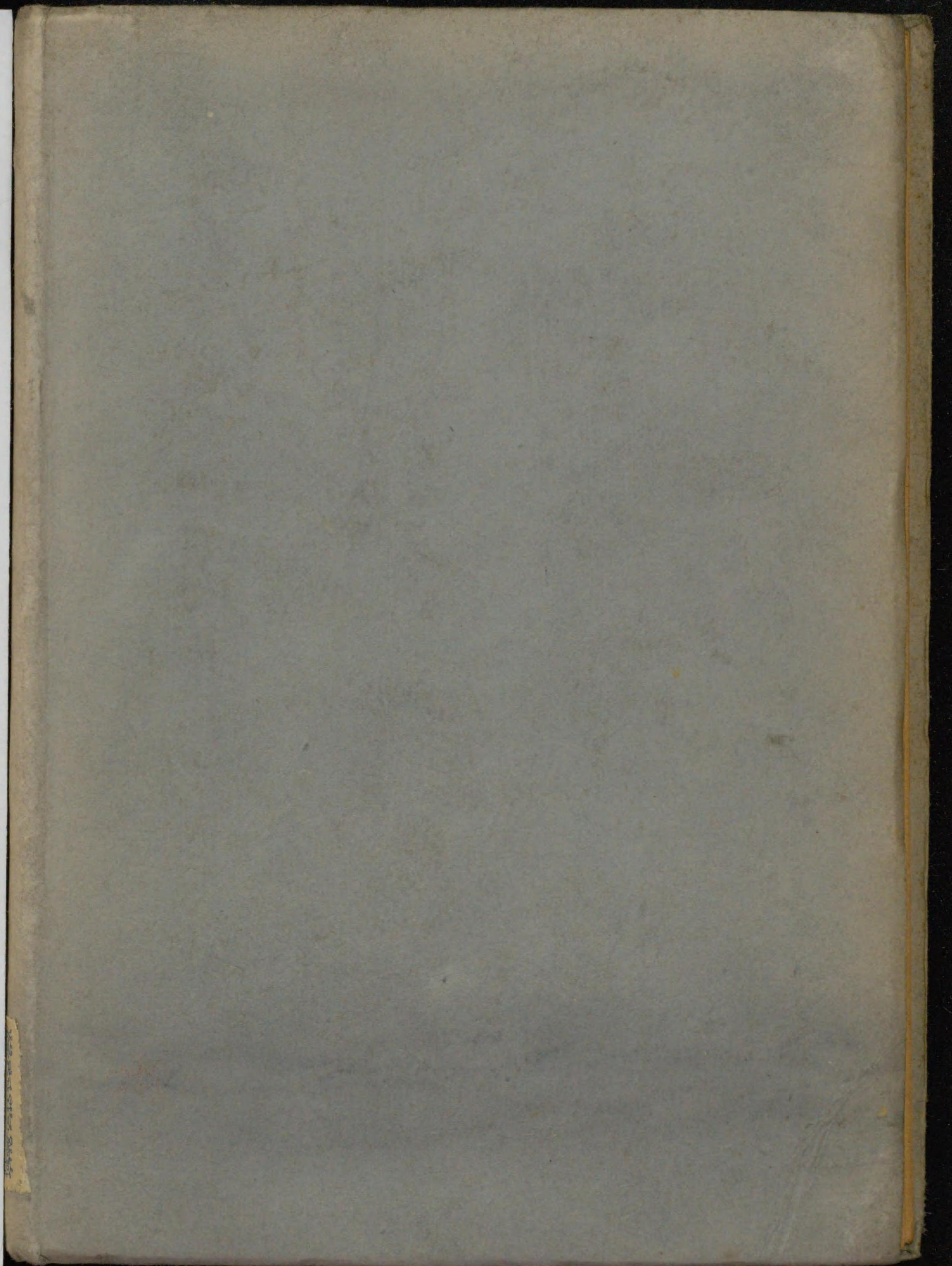
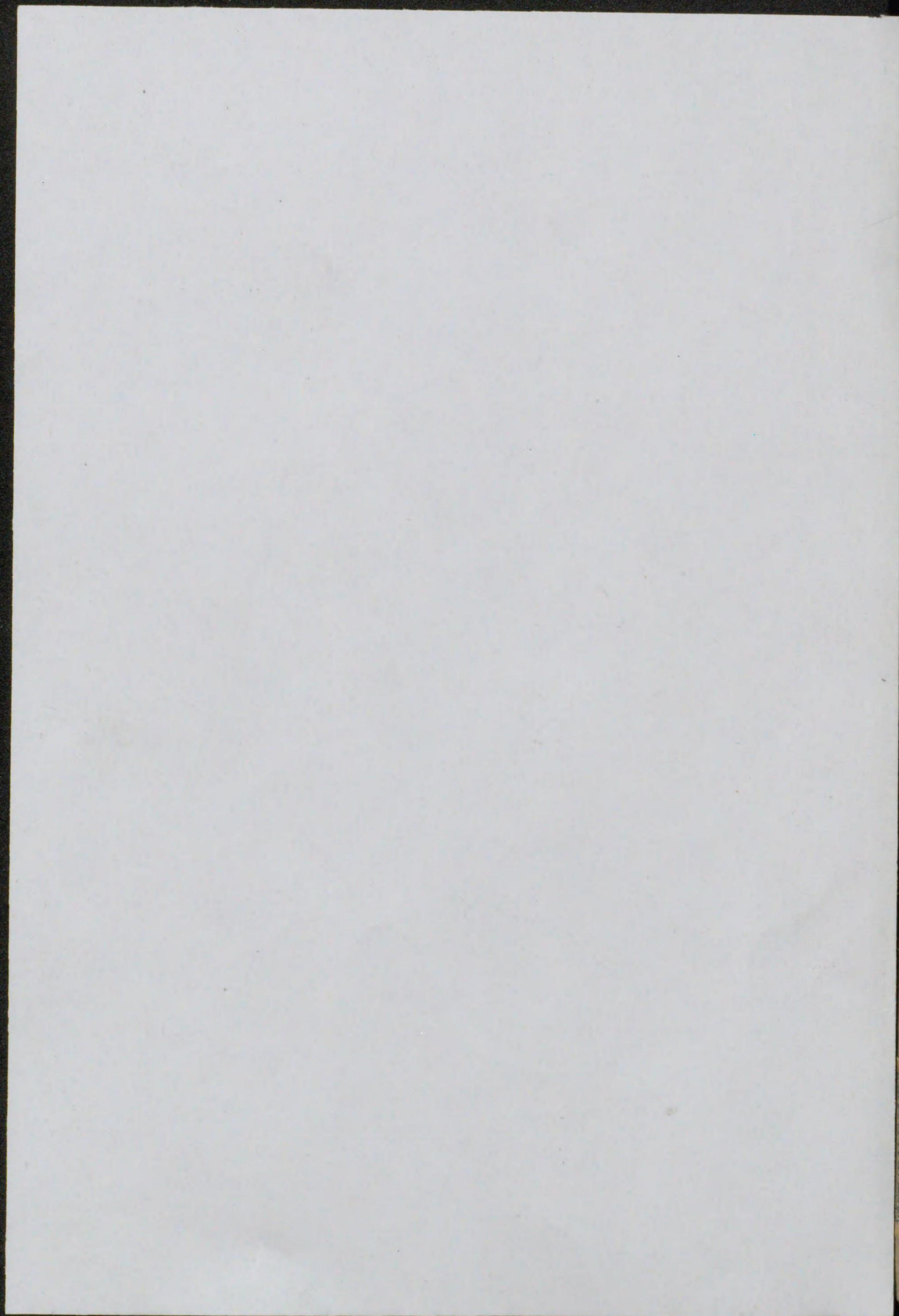


1



713  
179





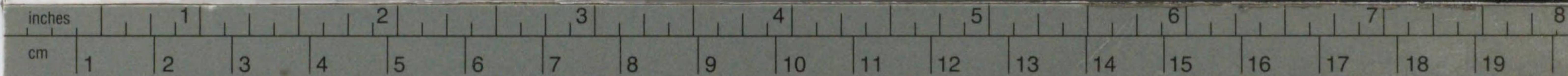


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

